

論文

古代ローマ奴隷制工・鉱業史 ——展開と終焉—— (下)

馬 場 典 明

目次

緒言 (前号)

第一章 ローマ工業奴隷制の経済的背景 —— 共和政末・帝政初期の陶器工業 —— (前号)

はじめに

第一節 アレティウム=テラ・シギルラータの生産 —— 成立と展開 ——

第二節 経済的背景

おわりに —— 帰結と展望 ——

第二章 アレティウム=テラ・シギルラータの終焉 —— ローマ奴隷制衰退相の再検討 —— (本号)

はじめに

第一節 アレティウム=テラ・シギルラータの終焉 —— 学説整理 ——

第二節 アレティウム=テラ・シギルラータ工業の拡大諸態様と衰退

おわりに

第三章 ローマ鉱山業の展開 (以下未完)

第一節 共和政末・帝政初期のローマ鉱山業の状態 —— イタリア及び西部諸属領における ——

第二節 共和政末・帝政初期の東部諸属領におけるローマ鉱山業の状態

第四章 ローマ鉱山業における奴隷制と》コロヌス《制

第一節 ローマ帝政期における鉱山《COLONVS》 —— 『ウィパスカ鉱山碑文』研究 ——

第二節 ローマ鉱山業における奴隷制と『コロヌス』制 —— Leges Metallorum 再考 ——

付 論 ローマの鉱山奴隷

第五章 ローマ経済における『貴顕身分』理念

第一節 営利不名誉論をめぐる諸学説

第二節 >Ps. Claudianum< をめぐる諸学説とその問題点

第三節 Liv. XXXI, 63, 3-4

——“Quaestus omnis patribus inecorus visus” に関する予備的検討 ——

補論 『ユーリア法』における船舶所有の禁止

第六章 《T・RVFRENI》と《C・VIBIENI》 —— ローマ貴族『営利不関与原則』の再検討 ——

序

第一節 アレティウム=テラ・シギルラータの成立

第二節 T. Rufrenus と C. Vibienus

第二章 アレティウム＝テラ・シギルラータの終焉

—ローマ奴隷制衰退相の再検討—

はじめに

アレティウム (Arretium: 現アレッツォ [Arezzo]) は、赤釉浮彫陶器＝テラ・シギルラータ⁽¹⁾ (terra-sigillata) (以下場合によって >T.-S.< 乃至 >S.< と略記) の生産中心地としてあまりにも有名 (Liv. IX, 37, 12; Vitruv. II, 8, 9; Plin. *N. H.* XXXV, 160; Sil. Ital. VII, 29 et alii) であり、事実その流通の跡は、地中海世界の至る所に及んだ⁽²⁾。

「イングランド中部からティグリスに至る全ローマ世界を支配」⁽³⁾ した、「世界的名声」の「真の大量消費品」⁽⁴⁾ として、広域市場の大需要を前提にして大々的な商品生産が展開されたことに疑いの余地はない。事実製造主の一人、コルネリウス (P. Cornelius) には、同一時にではないが、銘を残した奴隷だけで 50 名以上⁽⁵⁾ の多きが数えられた。

まさにそのことの故に、ローマ経済史における最主要課題の一つとして、『地中海世界』における商品生産と流通の在り方それ自体、次いでその消長による古代経済の本質規定に好個の題材を提供し続けた。「古代資本主義」説を支える最有力武器の一つとして、ローマ商品・貨幣経済の展開と衰退図式に組込まれたことがとりわけそうである⁽⁶⁾。筆者もまたかつてそこに内蔵された問題、つまりローマ奴隷制の定在形態それ自体、及び展開の仕方と帰結の重要性に鑑み、大規模化の一端を探るべく素描を図った後、その後の諸論攷においてもまた、部分的にはあれ言及を企てた⁽⁷⁾。併しそれらにおいては、すぐれて生産の成立と奴隷制の構造分析が問題とされ、衰退問題並びにそれに向けての奴隷制の展開は一先ず視野外に残された。

本稿の主目的はそこにある。改めてこれが問題とされねばならぬのは、1 世紀足らずの極めて短期間の内に、成立・拡大・衰退と消滅の全プロセスが完結されただけに、就中その衰退相の中に奴隷労働それ自体の、次いで地中海世界における商品・貨幣経済の、本来的に質的な問題諸点の最も直截的な形での表出が読み取られ得る、と考えられるからである⁽⁸⁾。

第一節 アレティウム＝シギルラータの終焉

—学説整理—

アレティウム＝シギルラータの基礎的研究——〈型〉と〈編年〉——は、ドラゲンドルフ (H. Dragendorff)、オクゼ (A. Oxé)、レシュケ (S. Loeschke) らによって進められ⁽⁹⁾、ドラゲンドルフ、ヴァーツィンガー (C. Watzinger) とオクゼ、コムフォート (H. Comfort) によって体系的な収集と一応のカタログングが完成された⁽¹⁰⁾。その一方では、情報量の急増に加えて研究のさらなる精緻化が進行する。装飾モチーフ・鋳型のシギルラータ母型研究 (ステニコ A. Stenico)⁽¹¹⁾、無銘例及びレプリカ諸例に対する生産地・製造主の特定に最も有効な化学分析 (焼成温度、

含有元素の種類と量)の導入(ピーコン M. Picon)⁽¹²⁾、あるいは奴隷・解放奴隷銘の収集と分析による内的生産構造への踏み込み(キーヒレ F. Kiechile、トレッジヤリ S. Treggiari、プッチー G. Pucci、プラッハナー G. Prachner 等々)⁽¹³⁾である。

だが併し、「衰退」の時期特定は、「成立」のそれと同様に⁽¹⁴⁾容易ではない。衰退の一般的起点を何処に設定するかの困難さに加えて、それ自体が既に絶対的基準を主張し得ない〈型〉——因みに今日なおドラグENDORFFのカタロギング、>Dragendorff Form I, II, III...〈略記: “Dr. Form 1, 2...”〉が『基本型』として使用され続けている——と〈出土事情〉の両者を最有力手段とせざるを得ないことの故に、年代特定は決して容易ではない。筆者の極めて大胆かつ不十分な検索と類型化によれば、従前の諸学説は略々次の如く整理され得る。(但しマルクアルト J. Marquardt⁽¹⁵⁾の如くイタリア全土を一律に処理したような学説は除外する。)

(1) ドラグENDORFFは、アレティウム=テラ・シギルラータのライン地方における激減と消滅がティベリウス期(A. D. 14 ~ 37) (以下<A. D.>年号は<a.>で略記)に属したことを指標にして、生産の停止を『a. 25 ~ 30』の間⁽¹⁶⁾に設定し、以来この時期推定が若干のヴァリエーションは示し乍らも略々共通の理解として止まることになった。

『a. 20』(バロウ R. H. Barrow)、

『a. 21』(オクゼ)、

『a. 25』(ウェスターマン W. L. Westermann、ブローガン O. Brogan)、

『a. 30』(チャールストン R. J. Charleston)、

『a. 25を中心とする20年代』(プラッハナー)等々である⁽¹⁷⁾。

この他、特定年は当てないが、『ティベリウス期』を推定した学説(グルニエ A. Grenier、トレッジヤリ)⁽¹⁸⁾もまた凡その時期設定そのものは同様であった。

(2) 「ラインラントからの後退」=「アレティウム=シギルラータの衰退と生産停止」の関係を見る諸学説に対して、この基準を疑問視したコムフォートは、いま一つの好個の編年基準を提供するものとしてボムペーイー発見諸例(最終下限は<a.79>)を考慮して、最早期以来の継続的な生産の跡を残した *M. Perennii* グループ(後述)には、『a. 40頃までの存続』、『後期シギルラータ』(Dr. Form XXIX; XXXVII)に関しては、(a. 79以後)の『ドミティアヌス期(a. 81 ~ 96)乃至それ以後における生産開始』を当てることによって、>T.-S.<の年代「引下げ」を提唱した⁽¹⁹⁾。その後ブラウン A. C. Brownもまた、同様の年代引下げ——但しラインラントからの後退は『a. 20年代末』——を主張し⁽²⁰⁾、さらに新しい所ではピーコック D. P. S. Peacockが『a. 40』説を踏襲した⁽²¹⁾。

(3) 第(2)説は併し、必ずしも定着を見ることはなかった。プッチーはボムペーイー諸例の検討を踏まえて、もしこの解釈が正鵠を射ているとすれば、アレティウム=>S.<の「消滅」と後期>S.<の「生産開始」——因みにこの両者間に於ける「人的」なそれを初めとする密接な関係は先にステニコが明らかにした所であるが⁽²²⁾——との間に、『半世紀間の空白』が生じる

ことになる、として後者の生産開始を早める一方、それに応じて前者の「一般的な生産停止」を再び『a. 30 頃』に引き上げた⁽²³⁾。

このように時期設定に関して、諸説は夫々が食違いを示した。併しなるほど夫々には、詳細な点で相違はあるにしても、大筋においてはほぼ共通した解釈が示された。即ち、アレティウム=>T.-S.<の衰退を後1世紀前半の『ティベリウス〜カリグラ治世期』(a. 14～41)に設定し、如何なる場合でもクラウディウス帝期(a. 41～54)以後までは生き延びなかったことである。

もとより時期特定には、古典諸報告に基づく如何なる絶対的な基準も残されていない以上、如何なる場合であれ、「消極的な証言」⁽²⁴⁾の域を出ないことは承知しておかねばならないにしても、少なくとも>T.-S.<の市場事情、とりわけ時期設定基準の上限を提供するライン下流域におけるローマ軍団駐屯の諸城砦、次いで躊躇なしに最終下限が設定され得るポムペーイー例に拠ってのみしかことは処理出来ない⁽²⁵⁾。併しそれでもなお、そこには他ならぬ「流通」の痕跡が直截的に表示されており、奴隷制経済の消長にとって、一つの極く大まかな基本線が得られたことで充分である。

プリーニウス(Plin. *N. H.* XXXV, 160f.)は、スルレントウム・ハスタ・ポルレンティア(Surrentum, Hasta, Pollentia)の高杯と並んで、当時「名声」が高かった(nunc laudantur)陶器として、アレティウムとムティナ(Mutina: Modena)で生産されていた>Samia vasa<を挙げ、これらは「海・陸路に依ってあちこちに運ばれている」(per maria, terras ultro citro portantur)、として、紀元後1世紀後半当時、アレティウムではなお『サモス式陶器』が広域市場に向けて生産され続けていたことを誌している。だがこれらはプリーニウス自身が言う如く、「ロクロ」を使用した(insignibus rotae officinis)無浮彫の『平滑碗』(G. Pucci: 'vasi lisci')⁽²⁶⁾であり、同例はポムペーイーで多数発見⁽²⁷⁾されているが、『范』利用の浮彫シギルラータ=《イタリア後期>S.<》⁽²⁸⁾の市場事情は、アレティウムのそれとはもはや比較にならなかった(第1図参照)。

もしこのような市場事情が、アレティウムにおける>T.-S.<生産の展開に決定的に重要であったとすれば、そこからの「後退」諸相が改めて問題とされねばならない。

従前の諸学説において、後述の如くほぼ共通した理解として前面に出されたのは、南・中部ガリアにおける>S.<生産の開始と市場進出との関係であり、アレティウムの市場後退が問題とされるからには、到底避けては通れない。併しここでは問題の本質上、《ガリア=シギルラータ》⁽²⁹⁾そのものへの立入りは不必要であり、アレティウム=>T.-S.<流通の『終焉』に関する時期推定基準を提供したライン流域市場に関して、既に確証が得られた両者の流通関係(分布事情と数量)を瞥見するだけでよい。

このためには、ライン流域を中心とした《南部ガリア=シギルラータ》の網羅的収集と類型化作業の上に、編年の体系化を図ったクノル(R. Knorr)の一連の作業がわれわれにはとりわけ有用であり、その結果は略々次の如く要約出来る。

[1] ライン地方における南ガリア=>S.<の初出例は、ホーフハイム (Hofheim) で、確認され、その到着は『a. 40 乃至 41』に属した。これに対して『1世紀の20年代に放棄』されたハルテルン (Haltern) 城砦では、>S.<の全てはアレティウム産で占められ、南部ガリア産はなおまだ現れない (‘noch keine südgallische Sigillata’) ⁽³⁰⁾。

[2] ネッカー上流域のロットヴァイル (Arae Flaviae: Rottweil) では、ハルテルンとは対蹠的に>T.-S.<の全てがガリア産で占められ、アレティウム産は現れない。ここで発見される大量の>S.<——<南部ガリア>産に新たに<中部ガリア>産が加わった、>Dr. Form XXIX, XXX, XXXVII<——は、『a. 74 以後』の到着を証言し、70年代後半～90年代前半の間に最も集中的であった ⁽³¹⁾。

この内、特にハルテルンに関しては、その後の新知見例の急増とそれを踏まえた帝政最早期の対ゲルマーニア政策の再検討 ⁽³²⁾ によって、今日では修正の必要がある。

『12B. C.』、対スガムブリ (Sugambri) 作戦に際して、ライン支流のリッペ河 (Luppia: Lippe) 沿いに建設された前哨城砦の一つハルテルンは、近年の遺構調査と古銭学によって ⁽³³⁾、『a. 9』に一旦放棄された後、『a. 14～16』の間にゲルマーニクス (Germanicus Iul. Caesar) によって一時的に使用されたことが判明したが、南部ガリアのラ・グローフザンク (La Graufesenque) =>S.<の発見は、この最終段階においてであった ⁽³⁴⁾。従って南部ガリア=>T.-S.<のライン到着は、1世紀の『10年代中頃』であったことが今や明らかであり、クノル説は部分的修正の上に、年代の引き上げが図られねばならない ⁽³⁵⁾。

これ以外は併し、多少の時期的なずれ ⁽³⁶⁾ はあるにしても、大綱においては略々承認され得る。即ち、1世紀40年代～90年代におけるガリア南・中部=>S.<のラインへの大量到着、それとは裏腹に進行する、イタリア=>S.<の市場後退である。

それと並んでいま一つの注目されるべき事実は、ゲルマン部族パタウィ (Pataui) の「反乱」(a. 69～70) に際して破壊——それ以前の『a. 47』にはカウキー族 (Chauci) によって部分的に破壊されていた——され、その痕跡が残されたクサンテン (Xanten: Vetera I=Colonia Ulpia Traiana)、ノイス (Neuß: Novaesium)、マインツ (Mogontiacum) ⁽³⁷⁾、及び1世紀30年代に一旦軍団駐屯を撤収したケルン (Col. Claudia Ara Agrippiniensium) ⁽³⁸⁾ の事例である。というのはこれらでは、帝政最早期の建設になる城砦遺構からアレティウムと南部ガリアのモンタン (Montans) 両者の>T.-S.<が発見されているからである ⁽³⁹⁾。即ち、アレティウム=>T.S.<と最早期属領産>T.-S.<(後述) 両者の、同一市場のみならず同一時期層における『混在』の事実である。

そればかりでは決してなかった。南部ガリア産は、『a. 70年代後半』には、他ならぬイタリア市場にさえ現れた。而もその数量は、市場の偶然性を排除するのに充分であった。ポムペーイー発見 (Regio VIII, Insula V, No. 9) の、木箱に梱包された>T.-S.<90例が好個の事例である ⁽⁴⁰⁾。これらは<Dr. Form XXIX> (36 ex.) と<Dr. Form XXXVII> (54 ex.) よりなり、形状それ自体に加えて《MANDVLM》、《OF・MOMMO》などスタンプ銘からしてもまた、紛れもなくガリ

ア南部のモンタンとラ・グローフザンクの《工房》—— *m (anu); [ex] of (ficina)* ——で生産されたものであった⁽⁴¹⁾。而も木箱には荷解きの形跡がない所から推して、恐らくポムペーイー最後の日 (a. 79) 以前のほど遠からぬ時期に到着したと考えられる⁽⁴²⁾。さらにこれに含まれていた《GERMANI》, 《GERMANI・OF》; 《OF・RVFINI》; 《OF・SECVND》; 《OF・SILVANI》⁽⁴³⁾ は、紛れもなく同一の鋳型に拠ったことが明白なシギルラータ = デザイン例を、『a. 73/74』⁽⁴⁴⁾ に城砦建設のロットヴァイルと共通にした⁽⁴⁵⁾。南部ガリアの、而も同一の《工房》が、遙か遠距離の地、イタリアと南ドイツの両者に >T.-S.< を引き渡していた事実である⁽⁴⁶⁾。

以上は勿論、事例の極く部分的な瞥見にすぎない。併しこれだけでも既に、1世紀中葉以後におけるアレティウム = >T.-S.< の市場後退と衰退、それとは対蹠的な南部ガリア =>T.-S.< の進出実態を窺い知るには充分であろう。

だとすればこの事態は、ローマ帝国経済の展開の中で如何に処理されるべきなのか。アレティウム = >T.-S.< の後退に関する『原因論』として、(筆者の大胆な整理によれば) ローマ経済史研究の諸学説は略々次の2群に整理することが出来る。

- [1] a. 新技術(吹矢法)の導入に伴う「ガラス工業の発展」⁽⁴⁷⁾ が結果した、イタリア内陶器需要の激減 (R. J. チャールストン)⁽⁴⁸⁾、
- b. イタリア = >T.-S.< の「最大の顧客」であった「中間階層の経済的不振」に伴う需要低下 (A. グルニエ)⁽⁴⁹⁾、
- c. 生活水準の上昇・高級食卓器需要の増大による陶器需要の減少が誘発した、「イタリア内陶器需要」の低下と「イタリア陶工」の市場喪失、及びその結果としての「属領陶器市場」の「現地陶工」への引渡し (Ch. グディノー Goudineau)⁽⁵⁰⁾、
- d. 帝国「産業保護策の欠如」 (J. W. ダッフ Duff)⁽⁵¹⁾、
- e. >Pax Romana< の成立に伴う「東方からの熟練製陶奴隷の流入停止」 (R. H. バロウ)⁽⁵²⁾ など。

この内、例えばグディノー説 (c) は明らかに、今日なおローマ経済史研究の底辺に止まり続けているかの感がある、次の第2説に対する批判学説として提示され乍らも、アレティウム・プテオリ等地中海市場支配のイタリア = >T.-S.< を有し、しかも陶器需要が激減した筈のその他ならぬイタリアへの、1世紀後半における南部ガリア = >T.-S.< の大量流入の事実を説明出来ない如く、これらはなるほど一側面は説明しても、前述の事態には充分に対応し得ない。従ってこの限りでは、何れもマイナーな学説として止められるべきであろう。事実チャールストン (a)、ダッフ (d) は第2説に基本を置くばかりか、>T.-S.< 生産に「資本主義的企業」 (capitalistic enterprise) をさえ語る⁽⁵³⁾。

[2] これに対してロストフツェフ (M. Rostovtzeff) は、周知の如く、共和政末・帝政初期、奴隷労働依拠の大々的な果樹栽培を基本としたイタリア大土地所有制の本質規定——『都市ブルジョアジー』を主要担い手とした『科学的かつ資本主義的な線』に沿った農場経営原理——の上に、

それを決定的な終焉にまで追い込んだ直接契機として、>Pax Romana<の下で進行した、帝国西部諸属領の『都市化』とそれに伴うイタリアからの『経済的な解放と遠心化』を挙げ、早くも1世紀後半フラウィー諸帝期に入るやその契機=諸属領との『市場競争』が現実のものとなった、としてイタリア商品・貨幣経済の萎縮とそれに伴う生産の構造的転換、なるローマ経済展開図式の中に、この現象をもまた組み込んだ。即ち、アレティウムを中心とするイタリア=>T.-S.<の、帝国西・北部市場を主前提とした『生産の拡大と市場支配』→『ガリア南・中部における>T.-S.<生産の成立と市場進出』→イタリア=>T.-S.<の『市場喪失』、とするローマ大土地所有制に構築された古代資本主義の展開・帰結図式と同一の図式である⁽⁵⁴⁾。

以来、アレティウムの>figlinae<(製陶所)に『資本主義的企業』を見ることによって古代資本主義説に直接与した場合⁽⁵⁵⁾であれ、あるいはそうでない場合であれ、とにかくこの『市場喪失』の図式そのものは、ローマ経済展開の最も一般的な理解の一つとして止まることになる。イタリア→ガリアへの生産中心地の移動に伴うアレティウムの『活動半径の縮小』⁽⁵⁶⁾、ガリア=>T.-S.<の地中海『全市場』への進出によるアレティウムの『窒息』⁽⁵⁷⁾、南部ガリアにおける>T.-S.<生産の『支工場』*branch factories*に看取された企業性がアレティウムの『主工場』*home factories*を窒息にまで追い込んだ⁽⁵⁸⁾、あるいはガリア=>T.-S.<との『市場競争』によるアレティウムの敗北⁽⁵⁹⁾、等々がそうであった⁽⁶⁰⁾。

1世紀の40年代に入って、アレティウム=>T.-S.<は帝国西・北部市場から急速に後退した。近年の考古学的知見が明らかにしたこの事実そのものは、勿論この場合、十分に踏まえられねばならない。だが併しこの事実の故に、如上の諸学説がそのまま承認されてよいことにはならない。何故ならば、>T.-S.<生産の成立・展開・帰結のプロセスの中で、「工業」としてのメカニズムがアレティウムで如何なる態様を示したのか、この検討が欠落するからである。

第二節 アレティウム=シギルラータ工業の拡大諸態様と衰退

『地中海世界』規模の大市場に向けて、奴隷労働依拠の大々的な商品生産が展開されながら高々1世紀間で姿を消し去った、生産の急激な拡大化と衰退のプロセスそのものに内在的なローマ奴隷制経済それ自体のメカニズム。

——蓋しこれが改めて問われねばならぬのは、他ならぬそこに(つまり『市場競争』によるイタリア経済の『窒息』を云々する前に)古代経済の最も本質的な諸相の直截的な表出が看取され得ると考えられるからである。

1. 生産拡大化の基本態様

アレッツォ市内に残る>T.-S.<生産のアトリエ跡=>figlinae<遺構は、市壁外直ぐ近くの8箇所その他、そこから約1km.離れた街道沿い2箇所(No. 9, 10)の10箇所で確認されている(第2図参

照)。この内、一名の製造主(L. Titius)だけしか銘を残していない>No. 3<と生産の痕跡だけで所有主名が不明の>No. 10<を除く他の全ては、夫々が複数の>figlinae<群によって構成された。次いでこのことの上に、銘事例から次の2現象が指摘され得る。

(1) 製造主間の相互関連

アンニウス(C. Annius)は、ペトラルカ劇場と聖フランチェスコ教会との中間地点(No. 1)に大々的な生産の痕跡を残したが⁽⁶¹⁾、製品に頻繁に見受けられる「ディオニソス秘儀場面」の構図とマスク・花冠のモチーフは、聖マリア・イン・グラディ教会(S. Maria in Gradi)の庭に遺構を残したラシーニウス(Rasinius)(No. 4)——但し《*Anteros//Rasin(i)*》(C. XI, 6700, 521), 《*Carpus//Rasini*》(id. 523), 《*Euticu(s)//Rasini*》(id. 530)等々、奴隷主としてのスタンプ銘にはプラエノーメンが欠落——のレパートリと同一であった⁽⁶²⁾。

さらに次の両現象もまた注目に価する。

第一は、前者の奴隷、パンタガートゥス(Pantagatus)が、前後関係は不明だが後者の奴隷としてもまた現れたこと⁽⁶³⁾、即ち、陶芸奴隷の〈移動〉⁽⁶⁴⁾である。これと同一の関係は、管見の及ぶ所、ラシーニウス～メンミウス(C. Memmius)間にも検出される。前者の奴隷マヘス(Mahes)は、前掲のアンニウスと並んで、同一場所(No. 1)にアトリエ遺構を残したメンミウスの奴隷となった後、自由身分を獲得した⁽⁶⁵⁾。

第二は、ラシーニウス～メンミウス間のさらに密接な関係である。《*Quartio Rasin(i)*》(id. 545)によってラシーニウス所有の奴隷として現れたクアルティオが、前掲の奴隷パンタガートゥスと同様⁽⁶⁶⁾、《*Quartio Rasini [et] [M]emmi*》(id. 546) ([]内の補填は筆者)として両者の連名の下に現れ、事情はさらに奴隷名欠落の《*Rasini Memmi*》(id. 552)によって補足される。明らかに連辞>et<を欠くことに加えて、奴隷に対する所有関係など詳細は不明だが、既に従前の諸学説で指摘されたように⁽⁶⁷⁾、この両製造主が夫々別個のアトリエに拠って独自の生産を維持したと同時に、他方では「共同」して生産に当たった>socii<の関係にあった、と見做され⁽⁶⁸⁾、筆者もまたこの銘文形式から推して、連辞の補填によって同様に考えたい。

而も多分に>socii<関係が推測されるこの事例は、両者だけに限られなかった。管見の及ぶ所では、キスピウス(C. Cispus)(No. 11)～カエシウス(L. Caesius)(但しアトリエ遺構は未確認)間(id. 193)、センプロニウス(L. Sempronius)～ゲルリウス(L. Gellius)(アトリエ遺構は両者ともに未確認)間(id. 311)、ティティイー(兄弟か?)(C. et L. Titii)間(No. 3)(id. 727)、ウムブリキウス(C. Umbricius)(No. 2)～アウィリウス(L. Avilius)(No. 2)間(id. 795)もまたそうであり、これらには、同一デザイン・奴隷の移動と並んで、生産の拡大化に際して採られた一般的形態の一つが理解されてよい。

(2) >figlinae< 間の移動

生産の拡大は併し、これだけに止まらなかった。既に早くも、他ならぬアレティウムにおいてさえ、生産の拡散化が実現されたからである。即ち、現アレッツォの近郊2箇所(No. 9, 10)に加えて、さらに約10 軒離れたアルノ川沿いの2箇所、チンチェルリ(Cincelli)(No. 11)とポンテ・ア・ブリアノ(Ponte a Buriano)(No. 12)両者における生産の成立がそれである。

既述の如く、ペレンニウス(M. Perennius)がいち早く設置した>figlinae<は、スタンプ銘によって、その後比較的長期間にわたって発展的に継承された痕跡を残したが、その時期的特徴は次の如くである⁽⁶⁹⁾。

第1期。聖マリア・イン・グラディ教会の庭で《M. Perenni》銘の生産が開始(No. 4)された⁽⁷⁰⁾。

第2期。残存事例の量と分布(市場)の広さから、生産の大拡張が知られるのは《M. Perenni Tigrani》銘であり、この期に、以前からの<No. 4>に加えて新たにチンチェルリ(No. 11)で生産が開始された⁽⁷¹⁾。このことは生産の拡大が、《OF COCI》(C. XV, 5108), 《OF FELICIS》(id. 5211; C. XII, 5686, 358h), 《OF PRIM》(C. XV, 5462)等々、[ex] of (ficina)の銘文表現に見られ、後に改めて今一度言及するであろう如く、〈窯〉(fornax)毎に設置された指揮奴隷(offinatores)の下での小規模労働組織=>officinae<の『増設』によってのみならず、(明らかにその延長上に)さらに別場所——原料と燃料の調達と同時に疑いもなく製品の積出しに有利な地理的条件に適ったと考えられる地(No. 9, 10; 11, 12)——への施設の新設によってもまた実現されたことを教える。

第3期。第2期のペレンニウス=ティグラヌスの>figlinae<を継承した⁽⁷²⁾かれのかつての奴隷⁽⁷³⁾が、今度はペレンニウス=バルガテス(M. Perennius Bargathes)の名において奴隷所有の解放奴隷として生産を専らとした時期。聖マリア・イン・グラディ教会庭での生産はなお継続されたが、遺構規模と残存デブリから推してチンチェルリの方が寧ろ主力を占めた⁽⁷⁴⁾。(第4期は省略)

今一人、バルガテスとほぼ同時期のコルネリウス(P. Cornelius)は、事情が異なった。>T.-S.<の製造主として最大規模の奴隷数が知られたかれは、現アレッツォ市内ではなくしてチンチェルリで、先に開設していたペレンニウス=ティグラヌスの>figlinae<と並んで——否そればかりかこの時点の浮彫りデザインもまた、頻繁なバルガテスとの類似性によって、『借用』さえ推測された——生産を開始し、次いでポンテ・ア・ブリアノの袂にもまた大々的な生産の跡(No. 12)を残した⁽⁷⁵⁾。

従って大々の生産のこの両者には、生産開始の時期的なずれと重なった、

『聖マリア・イン・グラディ教会→チンチェルリ』

『チンチェルリ→ポンテ・ア・ブリアノ』

なる、新場所へのアトリエ増設による生産拡大、次いで生産重心の後者への移動が見られたことになる。そればかりかチンチェルリでは、この両者の他に、キスピウス(C. Cispius)とガウィウス(C. Gavius)、ポンテ・ア・ブリアノでもまた、テルリウス(C. Tellius)が痕跡を残し、夫々に>figlinae<群が形成された。《新中心化》現象である。而もそれがアトリエ主間での技術的の

みならず人的にもまた相互関連を伴って実現されたことは、アンニウス (No. 10) ~ コルネリウス (No. 11 → 12) ~ テルリウス (No. 12) の間での奴隷の移動⁽⁷⁶⁾、ペレンニウス = バルガテス (No. 4 → 11) ~ コルネリウス (No. 11 → 12) 間、及びアンニウス (No. 10) ~ テルリウス (No. 12) 間の浮彫り構図・装飾モチーフの〈類似性〉、乃至は殆ど見分けがつかない事実上の《同一性》⁽⁷⁷⁾ に示される。

アレティウムで鮮明な形で検出された以上の両現象が明示したのは、とりも直さず、最も基本的とも言うべき生産拡大の態様に他ならなかった。即ち市場を前提とした >T.-S.< 生産の拡大が、ここアレティウムにおいては(銘文並びに考古諸知見の逐次検討は省略したが、プテオリその他においても同様に)、特定場所における特定 >figlinae< の『工場化』には向わなかったことである。そうではなくして、陶芸奴隷・鋳型の移動、鋳型及び製品のコピー生産など、人的並びに技術的な相互関連または >figlinae< 間の >societas< 関係なる、生産の基本性格を踏まえ乍ら、始源的には同一場所乃至隣接地、次いで別場所における >figlinae< の『増設』——指揮奴隷 (officinarios) の数量増を伴う作業単位 =>officina< の増設であって、施設そのものの『拡大化』では決してなかった——の形でのみ生産の拡大化が実現され得た。それ故疑いもなくそこに看取され得たのは、生産の一定限度以上の拡大を許さない古代経済の現実、つまり、コルメルラ (Colum. *De r. r.* I, 9, 7) に端的に表現されたような、専ら奴隷労働のより効果的な収奪を目的とした『人的』な組織化だけが可能であって、分業化に基づく『工場』的規模での体系的な生産の組織化を必要としなかった、否それを許さなかったと言わねばならない古代奴隷制それ自体⁽⁷⁸⁾ であり、従ってこの限りによって言えば、今や最も基本的と見做されねばならない奴隷制経済拡大化の2態様であった。

さらにこれに加えて、古代地中海世界における交通一般、とりわけ「陸路交通」事情が大幅に作用した商品流通の在り方⁽⁷⁹⁾、並びに恐らくまた原料調達事情⁽⁸⁰⁾ がその背後にあったのも確かであろう。

まこと、これがわれわれに重要なのは、その後のイタリア内及び帝国西・北部諸属領における事実上生産そのものの『地方的分散化』⁽⁸¹⁾ (但し流通の局地化ではない⁽⁸²⁾) さえ語られ得るほどの、>T.-S.< 生産の拡散(第3図参照)に対して、アレティウムで検出されたこの両現象が一つのプロトタイプを提供する、と考えられ得るからである。

2. 生産の拡散

この好個の事例は、《*Cn. Ateius*》銘によって提供される。イタリア内では、プテオリとピサの両者で生産を展開した‘*Ateii*’の自由人達⁽⁸³⁾ がそうであり、南ガリアのモンタンでは、Chrestus, Euhodus, Mahes, Xanthus 等々、明らかに不自由身分出自のコグノーミナを持つ‘*Ateii*’が大々的な生産の跡を残した⁽⁸⁴⁾。さらに最近ではリヨンとストラズブルでもまた、《*Ateius*》銘例の生産痕跡を残したアトリエ遺構が確認されている⁽⁸⁵⁾。

これらの内、われわれにとりわけ示唆的なのはモンタン例である。というのは、今日までに確

定済みの共通理解によれば、全西欧的な広がりを見せた >T.-S.< 生産の拡散がここを起点としたからである⁽⁸⁶⁾。アレッツォに多量の《*Cn. Ateius*》諸例 (C. XI, 6700, 102ff.) を遺したアレティウム = シギルラータと上掲銘モンタン = シギルラータとの型 (Dr. Form) ・構図・装飾モチーフの比較検討が明らかにしたのは、両者の《同一性》、即ち後者における *Cn. Ateii* の陶工達が、アレティウム = シギルラータのコピー生産——始源的には陶工自身の移動と鋳型の持込み——から出発したことであった⁽⁸⁷⁾。尤も当初、《*Cn. Ateius*》の >figlinae< 遺構が確認されていなかったこともあって、疑問と慎重論がなかったわけではないが (K. Hänle)⁽⁸⁸⁾、その後、現アレッツォのキメラ通り (Via della Chimera) に面して生産の痕跡が発見されるに及んで、一応の決着がつけられた⁽⁸⁹⁾。即ち最も直接的には、陶器工業のそれ自体の移動であり、経済的な意味での南部ガリアにおける『ローマ化』の一起点であった。

イタリア～ガリア間の直接的な関係は、さらに最近、リヨンで確認されたアトリエの一つで、《*Ateius*》銘の生産痕跡を残したラ・ミュエット (La Muette) におけるシギルラータ母型の中に、紛れもなくアレティウム起源のそれが確認されたこと (定量分析に基づく特定作業については後述)⁽⁹⁰⁾ によってもまた、補足的に説明される。

モンタンを起点に、ラ・グローフザンク、バナサク (Banassac) (及び小規模なアトリエ群) によって一大中心地を形成したガリア南部でもまた、とりわけこの3者間に同様の関係が看取された。複数の陶工による同一 >figlinae< の同時的利用——詳細は定かではなく、管見の及ぶ所この事実と言及した先行学説は見当たらないが、推測され得る可能性としては >societas< 関係か? ——と同時に、これら3生産中心地に跨がる同一陶工の同時的な >figlinae< 所有である⁽⁹¹⁾。

さらにこれに加えて、

(1) 『a. 25/30～トラヤヌス期』の間⁽⁹²⁾、全ガリアを中心に地中海沿岸部とライン流域に広範かつ大量流通の跡を残した、南部ガリアのラ・グローフザンク⁽⁹³⁾。

(2) 前者との密接な関係の下に、『a. 40』頃に成立し⁽⁹⁴⁾、『2世紀』に入って、ローマ軍団駐屯城砦を専らとした帝国東・北部市場を事実上支配したルズー (Lezoux)⁽⁹⁵⁾ を中心にして、何れも『1・2世紀交～2世紀30年代』の間に開始された中部ガリアに点在的なその他の生産地 (St. Rémy-en-Roklat, Vichy, St. Bonnet, Martres-de-Veyre, Lubié-La Palisse, Toulon-sur-Allier)⁽⁹⁶⁾。

(3) 2世紀に入って、大部分は併し『a. 100～130の間』⁽⁹⁷⁾ に成立する、東部ガリアの生産地 (La Madeleine, Chémery Faulquemont, Trier, Rheinabern など、コムフォート⁽⁹⁸⁾ の『アトリエ遺構リスト』には計22箇所の生産痕跡が算えられた^(98a))。

以上の3地域相互間のみならず各生産地夫々のアトリエ間にもまた、例えばトリアー (Trier) のアトリエ群の一つ、「工房 Nr. 1」‘Werkstatt I’に関する最近の調査、とりわけ鋳型の定量分析が明らかにした、最早期段階 (Stufe A) におけるブリックヴァイラー (Blickweiler) = アトリエの陶工銘《SATVRNINVS》、ラ・マドレーヌ = アトリエの陶工銘《SATTO》のスタンプをも

つ鑄型が直接トリアーで利用された事実を⁽⁹⁹⁾を初めとして、陶工及び鑄型の移動の形で、生産の人的並びに技術的な〈相互連関〉が指摘され得る⁽¹⁰⁰⁾。

これらの諸事象は、『テラ・シギルラータ』生産の拡散を介して、『ローマ世界』の経済的(かつ文化的にもまた)展開の仕方に関して、次の見通しを可能にする。

帝国西・北部諸属領における「工業」としての>T.-S.<生産の成立と展開が、時間的なずれを保ちつつ相互関連的に進行した〈地方的拡散化〉を伴い、いち早くコロニア Colonia Narbo Martius (118 B. C.) が建設⁽¹⁰¹⁾されたガリア・ナルポーネンシスに始まり、流通圏の拡大と同時に交通の量的かつ距離的な諸制約ともまた絡み合っで進行したことにおいて、ローマ属領経営プロセスの経済的な一断面を最も直截的に表示することである⁽¹⁰²⁾。

併し同時に、次の新知見もまた看過され得ない。

その一つが、リヨン例である。ここでは、計9箇所(旧市壁内2箇所・ソヌ沿い4箇所・ローヌ沿い2箇所の他、旧カナバエ [Canabae] 内に1箇所)⁽¹⁰³⁾に>T.-S.<生産の跡が確認⁽¹⁰⁴⁾され、その一つ、ソヌ沿いのラ・ミュエットで発見された鑄型断片に関して、出所の正確な特定のためになされた定量分析の結果、含有元素量、特にTiO₂とMgOから、その中に紛れもなくアレティウムで作成された鑄型とそれから直接この地で型どりしたことが確実な複製鑄型が確認された⁽¹⁰⁵⁾。このことは、リヨンにおける>T.-S.<生産の成立と展開がラ・グローフザンクの所謂〈ルテニ=シギルラータ〉(Rutenische Terra-sigillata)とルズーの〈アルウェルニ=シギルラータ〉(Arvernische Terra-sigillata)⁽¹⁰⁶⁾との直接的な関係の下に実現⁽¹⁰⁷⁾されつつもなおかつ、イタリアとの間に同様に直接的な関係(モンタンにおける>T.-S.<生産の成立がアレティウムとの直接的な関係に拠った事実と全く同様の)を維持したことを、新事実に拠って明示した。

以上によって明らかにされたのは、ガリアにおける商品としての>T.-S.<生産の成立と展開が、諸属領内の《横》関係と同時に、イタリア経済・文化との間にいわば《縦》関係を維持し続けた事実である。

この縦関係は、さらに、ライン流域において極めてプリミティヴな形で示された。いま一つの考古学的新知見である。

前出のハルテルン大城砦⁽¹⁰⁸⁾とベッキングハウゼン(Beckinghausen)小城砦⁽¹⁰⁹⁾の両者で、明らかにシギルラータ生産の>figlinae<遺構(前者では3基)が発見されたことがそれである。これらが帝政最早期、城砦の軍事的機能の喪失と運命を共にし、テラコッタ=ランプその他粗陶器類の生産痕跡からして、専ら駐屯兵士用日常生活品の調達を目的としたことは疑いないが、ここで同時にアレティウム=シギルラータのコピー生産が図られたことが確認された⁽¹¹⁰⁾。〈ルテニ=シギルラータ〉がなお到着していなかった間、現地調達の形でイタリア製品のコピー生産によって需要充足が図られた事実である⁽¹¹¹⁾。

これらに対して、ロットヴァイルは様相が異なった。最近の調査によれば、ここでもまた、>T.S.<生産の痕跡が3箇所を確認されたが、その一つ、市街南隅に残るそれは、背後に陶土を採

取した跡を伴い、南北 250 米×東西 70 米内に 12 基の窯を残した一大生産区であり、後 2 世紀の約 1 世紀間にわたる稼働の跡が確認された。これに対してフラウィア通りに面したいま一つは、これより先、『ドミティアヌス期』(a. 81～96)に生産を開始し、而も所謂〈ヘルウェティ＝シギルラータ〉(Helvetische Terrasigillata)のイミテーション生産から出発したことが確認された⁽¹¹²⁾。前述の如く>T.-S.<の全てがガリア産で占められたように、生産の成立に際して、イタリアとの間に直接的な『縦』関係はもはや見られない。

事実また、ガリア中部のピブラクテ(Bibracte: m. Mt. Beuvray)とチロル地方のガウティング(Gauting)における>T.-S.<需要の在り方⁽¹¹³⁾もまた、この間の事情を補足的に説明する。

おわりに

《アレティウム＝テラ・シギルラータ》の市場後退と終焉に関して、古典諸報告のほぼ完全な沈黙の最中であって専ら考古学的知見に拠って、経済史的な瞥見を図らざるを得なかったが、なお未処理問題が残された。

「ガリア南部→中部→東北部」への生産の〈拡散化〉に際して、「直接生産の担手は誰であったか」の銘文分析から出発さるべき>figlinae<の構造的分析⁽¹¹⁴⁾が第一であり、第二は、アレティウム＝シギルラータの地中海市場からの後退と衰退に内蔵された、古代奴隷制経済上の「時期的」と同時に「質的」な意味である。

特に後者が問題とされねばならぬのは、アレティウム＝シギルラータの〈衰退〉がイタリア大土地経営の不振と奴隷制経営悲観論の表面化(Colum. *De r. r.* I, praef. 1; Plin. *N. H.* XVIII, 21-38)と略々時期的に重なり、葡萄酒の品質低下⁽¹¹⁵⁾(Plin. *id.* XIV, 61-62)と同様に、ここでもまた、とりわけ光沢の鈍化と《シギルラ》sigilla仕上げの粗悪化に表現された品質低下⁽¹¹⁶⁾が進行し、而もそれが生産の量的拡大＝奴隷労働の数量拡大と軌を一にして表出された、と考えられるからである⁽¹¹⁷⁾。

だが併し、かの『古代資本主義』を梃子とした、地中海世界における商品・貨幣経済、その展開と衰退の図式が、そのまま基本的に踏襲されるかまたは新知見による補強が図られる一方、個々の側面での批判及びそれらを踏まえた新仮説への模索が続けられている現状⁽¹¹⁸⁾にあって、以上の作業はなお未処理課題を残したとは雖も、結果的にはローマ経済史における〈新地平〉の切拓きに連なる諸事実の確認を以て終わることになる。

[1]『アウグストゥス期』、帝国西・北部諸属領を主要市場として成立・展開されたアレティウム＝シギルラータの生産は、1世紀中葉の『クラウディウス期』以後まで、その性格と規模(広域大市場を前提とした奴隷労働依拠の)を維持し得なかった。これとは裏腹にプテオリとピサ、次いでガリアではいち早く南部に成立し、中部から東北部へと空間拡大の形で生産が展開され、遠距離主要市場の一つ、ライン流域では、ガリア＝シギルラータとの間に略々完全な交替が進行する。そればかりかガリア＝シギルラータは、ローマのモンテ・テスタッチオ(Monte

Testaccio) がその好個の事例を提供するヒスパニア = オリーブ油・アムフォラの事実上の〈市場支配〉⁽¹¹⁹⁾と同様に、他ならぬイタリアに市場を見出しさえした。

だが併しこのこと、つまりガリア = シギルラータ生産の成立と市場進出がイタリア = シギルラータの『市場喪失』を齎らし、イタリアの奴隷制経済を『窒息』にまで追い込んだのでは決してなかった。

[2]アレティウムにおける(次いでイタリアとガリアにおいても同様に) >T.-S.<生産の拡大は、次の基本的とも見做され得る諸態様のうちに実現された。即ち、

(a) 生産諸施設、とりわけ「施設」*instrumentum figlinarum*としての『奴隷』と『窯』*fornax*の(拡大ではなくして)数量的な増設を基本としながら、

(b) 隣接すると否とを問わず製造主相互間における提携関係(*societas*)乃至人的・技術的相互関係、

(c) さらにその上に、最大規模の両製造主(M. Perennius Tigranus, P. Cornelius)に明白であった如く施設それ自体の、疑いもなく原料調達と製品輸送により有利な地への移動、

(d) その結果として、複数場所に及ぶ施設の『複数散在』的な同時所有によって、生産規模の拡大化が実現されたことである。

従ってこのことは、形態的にはイタリア内の複数箇所(例えば小プリーニウスは6箇所)に『地所』*praedia*——而もその「I箇所」の「一つ」の地所それ自体が既に単数形(*praedium*)ではなくして「複数形」存在であった——の散在的所有を最も基本的としたイタリア大土地所有制⁽¹²⁰⁾、そしてまた『地所』及び『施設』*figlinae*の集積的所有によってのみ大規模化が(ローマ皇帝と貴顕身分の下で排他的に)進行した >opus doliare<(タイル・レンガ等粗陶器類)の生産⁽¹²¹⁾と共通し、その限りでは、ローマ経済の最も基本的な一般態様の一つとして理解されてよい。

これを招来したものは、一にかかって、古代地中海世界における商品・貨幣経済の現実であった、と見做されねばならない。一定限度以上の拡大化を容さない、つまり大々的であろうとなかろうと、規模の大小を問わず、とにかく奴隷労働に依拠した生産体制にあっては、偏により効果的な収奪を目的とした労働の『人的』な組織化によってのみ、それ故にまた、そこだけで生産の全プロセスが完結される諸施設の複数並列的な設置(一箇所においてであれ、複数箇所にわたってであれ)によってのみ、生産の拡大化が可能であったにしても、生産過程の体系的な分業化に基づく『工場』的規模の生産とそれによる『市場支配』、並びにそれを喚起する大々的な商品需要には到底及びもつかなかった。

これに、古代世界が解決出来なかつたいま一つの課題が付加された。『ローマ世界』の拡大に伴う市場の拡散と長距離化に対処すべき輸送能力の問題(とりわけ輓具の不備に大幅に制約された内陸重量輸送)がそれであった⁽¹²²⁾。

続いて起こる全西歐的規模での生産の拡散化もまた、これらの延長線上に位置したことは自明的である。

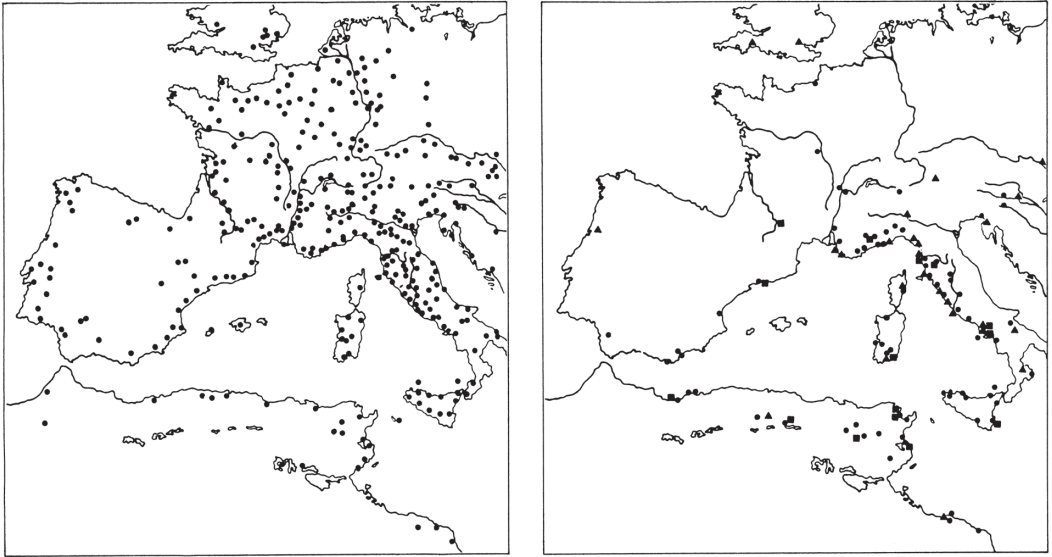
[3] 事実関係それ自体からすれば、アレティウム＝シギルラータの『市場喪失』は、少なくとも〈現象的〉には承認されてよい。だが併し、たとえ結果的にはそうであったとしても、それがアレティウムにおけるシギルラータの生産を衰微にまで追込んだ主要直接原因になったのでは決してなかった。そうではなくしてそれ以前の問題、つまり拡大化それ自体は>T.-S.<だけに限らないローマ経済の一般現象であったにしても、組織的な分業化を踏まえた『工場化』には至らなかった、生産の拡大化諸相が明らかにした古代商品・貨幣経済並びに奴隷制に本来的なメカニズムこそが決定的に重要であった⁽¹²³⁾。

まさにそのことの故に、支配の領域的拡大と『ローマ化』の進行に時間的かつ空間的に略々歩調を合わせて、始源的にはイタリア＝シギルラータ(アレティウムのみならずプテオリその他をもまた含めた)のコピー生産から出発する、生産の《拡散化》と《地方化》が進行する。それと共に、紀元前1世紀の後半、首都ローマを初めイタリア内外の市場を前提として成立し、それによって奴隷制の大々の展開を可能ならしめたアレティウムのテラ・シギルラータ生産は、品質低下⁽¹²⁴⁾を顕わにしつつ萎縮し、かつての歴史的役割を終わることになる。

以上が、《アレティウム＝テラ・シギルラータ》の終焉に関わる瞥見の一先ずの帰着点であり、それはまた同時に、そこから出発して、ローマ奴隷制の展開(より厳密にはその「態様」とそこから照射した『ローマ世界』における経済的《拡散》と《地方化》という、ローマ経済史の新たな視座の設定——「展望」としてのローマ奴隷制経済『終焉』への道——に連なった。

だが併し、その《テラ・シギルラータ》自身に関してさえ未検討課題が残された。アレティウム＝シギルラータと同様に、諸属領におけるそれに関して生産構造のレヴェルにまで及ぶ検討が不可欠であり、さらに、大々的な生産と広域流通の痕跡を残した前掲のラ・グローフザンク、ルズーに加えてラインツァベルン(Rheinzabern)の3大生産地夫々に関して消長の実態、とりわけ従来の方法を一步踏み出して、シギルラータ流通痕跡の空間的に計量的な処理とそれに基づく市場圏の確認作業⁽¹²⁵⁾もまた必要であろう。

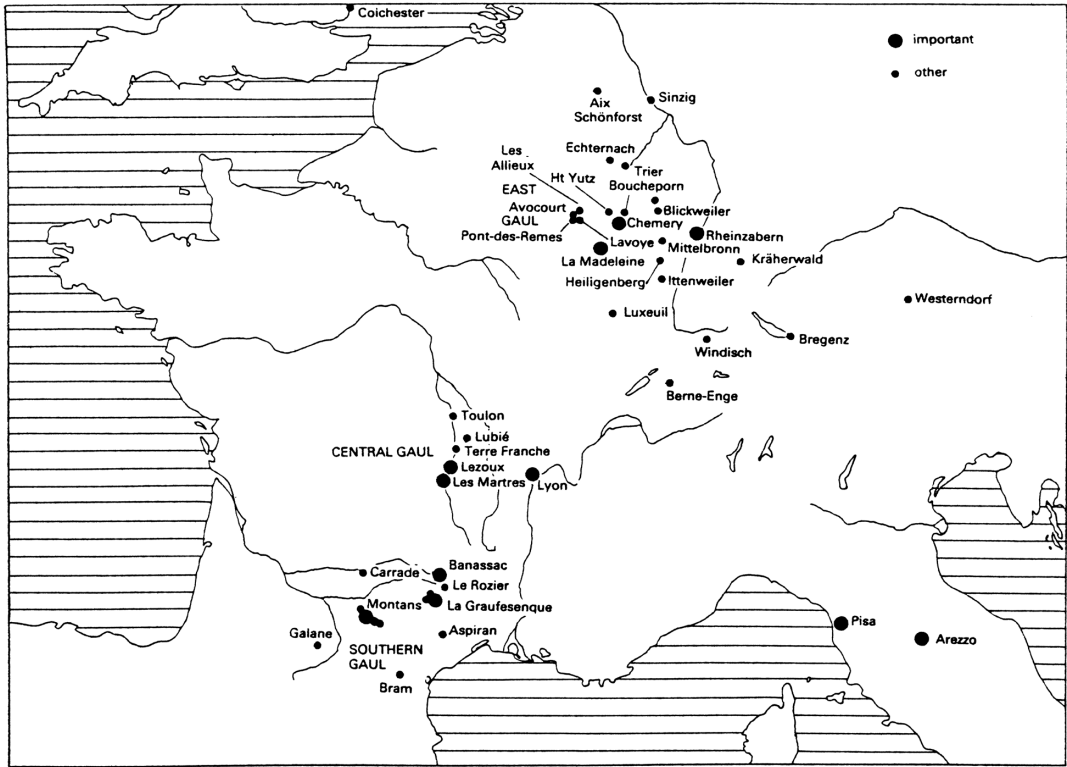
そして、古代商品・貨幣経済の展開と終焉にとって何にもまして重要な最終課題は、全西欧的に拡散化したテラ・シギルラータの生産もまた、殆ど大多数の場合、『2世紀』の内に姿を消し去ったことである⁽¹²⁶⁾。



第1図 アレティウム=シギラータ(左)と後期イタリア=シギラータ(右)の分布
(Pucci, G., *La ceramica italiana*, Roma 1981, Tav. 17; 21 の部分転載)



第2図 アレッツオ市内(左)及び周辺域(右)における >figlinae< 群 (No. 1 ~ 12)
(Bormann, E., *CIL*. XI, 1082 より作図)



第3図 テラ・シギルラータ生産地
(Peacock, D. P. S., *Pottery in the Roman World*, London 1982, Fig. 60 の転載)

[註]

(1) 本稿では、経済史的な扱いだけが問題であり、形状(型)・浮彫り構図・装飾モチーフ等、テラ・シギルラータの工芸面に直接立入ることは避ける。

(2) 第1図参照。流通は勿論この枠内に限られることなく、遠くはインド南部にまで及んだ。Charlesworth, M. P., *Trade-Routes and Commerce of the Roman Empire* (London 1970²), pp. 98–111; Id., ‘Roman Trade with India’, in: Coleman-Norton, P. R. (ed.), *Studies in Roman Economic and Social History. In Honor of A. Chester Johnson* (Princeton 1951), p. 137; 竹島淳夫「羅馬帝国の印度貿易」『古代学』III/3 (1954), 305–315頁。アレッツォ〜ローマ間の流通路については、cf. Loane, H. J., *Industry and Commerce of the City of Rome* (Baltimore 1938), p. 48.

(3) Comfort, H., ‘Terra-sigillata’, in: Frank, T. (ed.), *An Econ. Surv. of Anc. Rome* V (Baltimore 1940), p. 192.

(4) Oertel, F., ‘The Economic Unification of the Mediterranean Region’, in: *Camb. Anc. Hist.* X (Cambridge 1934²), p. 349.

(5) 「58名」(H. Gummerus; M. E. Park), 「57名」(G. Pucci), 「65名?」(G. Prachner).

Gummerus, H., ‘Industrie und Handel’, in: *RE.* IX/2 (Stuttgart 1916), 1487; Park, M. E., *The Plebs in Cicero’s Day: a Study of their Provenance and of their Employment* (Cambridge, Mass. 1918; Repr. N. Y. 1975), p. 86; Pucci, G., ‘La ceramica italiana’, in: Giardina, A. e Schiavone, A. (a cura di), *Società romana e produzione schiavistica* II (Roma/Bari 1981), p. 102; Prachner, G., *Die Sklaven und Freigelassenen im arretinischen Sigillatagewerbe* (Wiesbaden 1980), S. 223.

(6) 後述箇所参照。さらにこれとは別の(乃至否定的な)解釈もまた、看過は宥され得ない。即ち古代経済においては、〈工業〉への『資本投下』は「限定的」にだけしかなされなかった——この点に関してだけは、後に改めて言及予定のロストフツェフ説も同様——とするヴェーバー、及び古代経済は『資本提携』と『株式組織』の、「真の意味での工場経営」を知らなかった、として産業形態としての資本主義の存立を否定したサルヴィオリの両説である。Weber, M., *Wirtschaftsgeschichte* (Leipzig/München 1924²), S. 180f.; Id. *Wirtschaft und Gesellschaft* (Winckelmann, J. [hrsg. von], Tübingen 1972), SS. 770 u. 774; Rostovtzeff, M., *The Social and Economic History of the Roman Empire* (Oxford 1926), p. 161ff., esp. p. 168; Salvioli, J., *Der Kapitalismus im Altertum* (Stuttgart 1922), S. 111f.

古代経済のこのような理解及びその延長線上のアレティウムにおけるテラ・シギルラータ「工業」の位置付け——『例外的大規模工業』——をめぐる論議としては、次の諸学説を参看されたい。Gummerus, H., *a. a. O.* S. 1454; Frank, T., *An Econ. Hist. of Ancient Rome* (Baltimore 1927²), p. 223; Barrow, R. H., *Slavery in the Roman Empire* (London/N. Y. 1928), p. 115ff.; Mickwitz, G., ‘Zu Problem der Betriebsführung in der antiken Wirtschaft’, *VSWG.* XXXII (1939), S. 17ff.; Westermann, W. L., ‘Industrial Slavery in Roman Italy’, *JEH.* II (1942), p. 152ff.; Schtaerman, E. M., *Die Blütezeit der Sklavenwirtschaft in der römischen Republik* (Wiesbaden 1969), S. 102ff.; Brunt, P. A., *Social Conflicts in the Roman Republic* (London 1971), p. 20ff.; Pekáry, Th., *Die Wirtschaft der griechisch-römischen Antike* (Wiesbaden 1976), S. 94.

(7) 馬場典明(a)「ローマ工業奴隷制の経済的背景」『西洋史学論集』V (1958), 3–20頁; 同(b)「ローマの工業」『古代史講座』IX (1963), 88–91頁; 同(c)『《T・RVFRENI》と《C・VIBIENI》』『歴史学・地理学年報』III (1979), 8–23頁;

同 (d)「営利不関与と Plebiscitum Claudianum」同誌 VII (1983), 2-8 頁。

(8) 従って本稿では、アレティウム(ガリアに関してもまた)における製造主=アトリエ主の実態にまで及ぶことはない。かれらの社会経済的地位に関しては次の両学説、Wiseman, T. P., 'The Pottery of Vibienus and Rufrenus at Arretium', *Mnemosyne* XVI/1 (1963), pp. 275-283; D'Arms, J. H., *Commerce and Social Standing in Ancient Rome* (Cambridge, Mass. 1981), p. 65 参照。さらに前者に対する筆者の批判は、前掲註 7 (c) に挙げた拙稿, 1-31 頁参照。

(9) Dragendorff, H., *Terra-sigillata. Ein Beitrag zur Geschichte der griechischen und römischen Keramik. Bonn. Jb.* XCVI (1895), SS. 18-155; Oxé, A., 'Römisch-italische Beziehungen der früharrentinischen Reliefgefäße', *Id.* CXXXVIII (1933), SS. 81-98; Id., *Arretinische Reliefgefäße von Rhein* (Frankfurt a. M. 1933; Nachdruck Bonn 1968); Loeschke, S., *Keramische Funde in Haltern. Mitt. d. Altertumsk. f. Westfalen V* (Münster 1909); Id., *Die römische Keramik aus Oberaden*, in: Chr. Albrecht (hrsg.), *Das Römerlager in Oberaden* Bd. II/2 (Dortmund 1942); Walters, H. B., *Catalogue of the Roman Pottery in the Departments of Antiquities. British Museum* (London 1908) .

(10) Dragendorff, H. -Watzinger, C., *Arretinische Reliefkeramik* (Reutlingen 1948); Oxé, A. (Comfort, H. [ed.]), *Corpus Vasorum Arretinorum* (Bonn 1968) .

(11) Stenico, A., *La ceramica arretina* I. Museo archeologico di Arezzo; Rasinius I (Milano 1960); Id., *La ceramica arretina* II. Collezioni diverse, punzoni, modelli, calchi, ecc (Milano 1966) .

(12) Picon, M., *Introduction à l'étude technique des céramiques sigillés de Lezoux* (Dijon 1973); Id. et Vichy, M., 'Recherches sur la composition des céramiques de Lyon', *Rev. Arch. de l'Est et du Centre-Est* XXVI/1 (1974), pp. 37-59.

(13) Kiechle, F., *Sklavenarbeit und technischer Fortschritt im römischen Reich* (Wiesbaden 1969); Treggiari, S., *Roman Freedmen during the Late Republic* (Oxford 1969); Pucci, G., 'La produzione della ceramica arretina: Note sull'industria nella prima età imperiale romana', *DArch.* VII (1977), p. 266ff.; Id., 'Le terre sigilate italiane, galliche e orientali', in: Carandini, A. (diret. resp.), *L'instrumentum domesticum di Ercolano e Pompei nella prima età imperiale* (Roma 1977), p. 9ff.; Id., 'Pottery and Trade in the Roman Period', in: Garnsey, P. et al. (eds.), *Trade in the Ancient Economy* (London 1983), 105ff.; Prachner, G., *a. a. O.*

(14) 註 7 (c) に挙げた前掲拙稿、8-10 頁参照。

(15) Marquardt, J., *Das Privatleben der Römer* II (Leipzig 1882), S. 639.

(16) Dragendorff, H., *Arret. Reliefgefäße*, SS. 15-19.

(17) Barrow, R. H., *op. cit.* p. 115; Oxé, A., *Arret. Reliefgefäße*, 6-7; Westermann, W. L., 'Sklaverei', *RE.* Suppl. VI (Stuttgart 1935), 1028; Id., *The Slave Systems of Greek and Roman Antiquity* (Philadelphia 1955), p. 92; Id., 'Industrial Slavery' *cit.* p. 157; Brogan, O., *Roman Gaul* (London 1953), 143; Charleston, R. J., *Roman Pottery* (London 1955), p. 11; Prachner, G., *a. a. O.* S. 3. 但しオクゼとプラッハナーのそれは、アレティウム => T.-S.< の生産停止年ではなくして、ライン地方への『流入停止年』である。

(18) Grenier, A., 'La Gaule romaine', dans: Frank, T. (ed.), *An Econ. Surv. of Ancient Rome* III (Baltimore

1937), p. 546; Treggiari, S., *op. cit.* p. 91.

(19) Comfort, H., 'Terra-sigillata', *RE. Suppl.* VII (Stuttgart 1940), S. 1309f.

(20) Brown, A., *Catalogue of Italian Terra-sigillata in the Ashmolean Museum* (Oxford 1968), pp. xviii and 38.

(21) Peacock, D. P. S., *Pottery in the Roman World: an Ethnoarchaeological Approach* (London/N. Y. 1982), p.

116. 因みにかれは、アレティウム=>T.-S.<一般及びそこから派生したイタリア=>T.-S.<に関して、『a. 60~70』までの存続を見た。

(22) Stenico, A., 'Ceramica arretina a rilievi e terra-sigillata tardoitalica', *RCRF. Acta*, II (Roma 1959), pp. 51-61.

(23) Pucci, G., 'Le terre-sigillate italiane' *cit.* pp. 9-21.

(24) Brown, A. C., *op. cit.* p. xviii.

(25) 今一つの年代推定手懸りは奴隸命名法であり、この先駆的研究、Oxé, A., 'Zur aelteren Nomenklatur der roemischen Sklaven', *Rh. Mus.* LIX (1904), SS. 108-140 は、これを>T.-S.<の編年に連動させた。併しこれには、不確定要素が多すぎる。例えば、オクゼが『ティベリウス期以前』には「殆どあり得ない」、と見做した底部捺印銘諸例の内、『T. Rufreni』は、明らかに共和政最末期・アウグストゥス最早期に属した(註 [7(c)] 抽稿 17-29 頁参照)。さらにまた *Eros Aureli*, *Eros L. Aureli* 等々、奴隸が奴隸主名の前に置かれた形式に対して、『L. Aureli Eros (fecit)』, *L. Aureli Erotis* (opus) の奴隸名後置形式に、オクゼは『ティベリウス期以後?』の『恐らく解放奴隸』を特定した。その後シャントレインはこれを踏襲して、この形式を『ティベリウス期に開始』する『解放奴隸だけ』の命名法と断定した。併し(奴隸名後置)は管見の及ぶ所では、碑文関係史料では極めて一般的であり、『*Aurelii L. lib. Eros*』の定式を執らない限り、「解放奴隸のみ」に特定は出来ない。Chantraine, H., *Freigelassene und Sklaven im Dienst der römischen Kaiser: Studien zu ihrer Nomenklatur* (Wiesbaden 1967), S. 9.

(26) Pucci, G., *art. cit.* p.13. Vgl., Prachner, G., *a. a. O.* SS. 1-2.

(27) Pucci, G., *ibid.*

(28) 本稿は問題外として、これには直接立入らない。

(29) 一般叙述と研究史の整理は次の諸文献参照。Grenier, A., *art. cit.* pp. 541-2.; Charleston, *op. cit.* pp. 17-21; Johns, C., *Arretine and Samian Pottery* (London 1971), pp. 9-27; Duval, P.-M., *La Gaule jusqu'au milieu de V^e siècle* (Paris 1971), pp. 115-124. なおガリア南部のラ・グロフザンク =>T.-S.<の主要特徴——鉄分高含有陶土と高燃焼温度(950°C)によるガラス質肌の封ロウ様赤釉(sealing-wax red glaze)——については、次の両文献参照。Oswald, P.-Pryce, T. D., *Introduction to the Study of Terra-sigillata* (London 1920; repr. 1965), p. 6ff. and p. 13; Kiechle, F., *a. a. O.* SS. 92-94.

(30) Knorr, F., *Töpfer und Fabriken verzierter Terrasigillata des ersten Jahrhunderts* (Stuttgart 1919), SS. 3-5; *Id., Terra-sigillata-Gefäße des ersten Jahrhunderts mit Töpfernamen* (Stuttgart 1952), S. xii.

(31) Knor, R., *Südgalische Terra-sigillata- Gefäße von Rottweil* (Stuttgart 1912), SS. iii-iv.

(32) Vgl. z. B., Christ, K., 'Zur augusteischen Germanienpolitik', *Chiron* VII (1977), SS. 149-203.

(33) Kraft, K., 'Das Enddatum des Legionslagers Haltern', *Bonn. Jb.* CLV-CLVI (1956), S. 95f.; Schönberger, H., 'The Roman Frontier in Germany: an Archaeological Survey', *JRS.* LIX (1969), p. 147.

(34) Schönberger, H., *art. cit.* pp. 147-149; Id., ‘Haltern’, in: Stillwell, R. (ed.), *The Princeton Encyclopedia of Classical Sites* (Princeton 1976), p. 377; Oxé, A., *Arret. Reliefgefäße*, S. 38f.; Id., *Frühgallische Reliefgefäße vom Rhein* (Frankfurt a. M. 1934; Nachdruck, Bonn 1968). S. 1; Grenier, A., *art. cit.* p. 545.

(35) 但し Prachner, G. (*a. a. O.* S. 3) は、南部ガリアの生産開始を1世紀『10年代』に設定し乍らも、ハルテルンにおけるガリア例の消滅を『a. 9』に置いており、もしそうだとすれば、この年代設定では、南部ガリア=>T.-S.<はハルテルンには未到着のままに終わったことになる。

(36) Schönberger, H., *art. cit.* p. 152f.

(37) Id., pp. 144f. and 152f. Vgl., Hinz, H., ‘Die Colonia Ulpia Traiana bei Xanten’, in: Bömer, F. (hrsg.), *Germania Romana I* (Heidelberg 1960), SS. 29-50; Id., ‘Colonia Ulpia Traiana. Die Entwicklung eines römischen Zentralorts am Niederrhein’, in: *ANRW*, II, 4 (Berlin 1976), SS. 825-869; Baatz, D., ‘Die Topographie des römischen Mainz’, in: *Germ. Rom.* I cit. SS. 51-58; Decker, K.-V. u. Selzer, W., ‘Mogontiacum. Mainz vor der Zeit des Augustus bis zum Ende der römischen Herrschaft’, in: *ANRW*, II, 5, 1 (Berlin 1976), SS. 457-559.

(38) Schönberger, H., *art. cit.* S. 152; Doppelfeld, H., ‘Das römische Köln’, in: *Germ. Rom.* I cit. SS. 11-23; Id., ‘Das römische Köln’, in: *ANRW*, II, 4 (1975), SS. 715-782.

(39)

	銘	クサンテン	ノイス	ケルン	マインツ
アレ テ イ ウ ム	M. Peren. Tigrani	1	8	—	5
	M. Peren. Bargath	—	4	1	—
	Memmi	—	3	—	—
	Rasini	—	4	—	—
モン タ ン	Cn. Atei	—	10	—	—
	Cn. Atei Xanthi	3	5	1	4
	Cn. Atei Hilari	—	1	—	—

(Oxé, A., *Arret. Reliefgefäße*, S. 4 に拠って筆者作成。数字は収録例数。)

(40) Atkinson, D., ‘A Hoard of Samian Ware from Pompeii’, *JRS*, IV (1914), p. 27. Cf., Grenier, A., *art. cit.* p. 547; Charleston, R. J., *op. cit.* p. 17.

(41) Atkinson, D., *art. cit.* p. 28f. Knorr, R., *Töpfer und Fabrikenn*, S. 8f.; Pucci, G., *Le terre sigillate*, p. 17.

(42) この点について、上掲の諸学説は一致した。この箱には、《Communis》、《Fortis》、《Strobilis》のスタンプ銘をもつ、明らかに北イタリア産のテラコッタ・ランプ 37 個が一緒に梱包されており (Atkinson, D., *loc. cit.*; Picci, G., *loc. cit.*)、>T.-S.<を入れたこの箱がガリア=>figlinae<からの直送でなかったのは確かである。因みにローマン・ランプもまた、その流通実状の故に、>T.-S.<と同様にローマ経済史の重要課題の一つとして、看過され得ない。とりわけロストフツェフによる『古代資本主義』図式への組込みの故にであり、銘収集を含めて筆者の作業は目下進行中である。Vgl. z. B., Menzel, H., *Antiken Lampen* (Mainz 1969), Katal. SS. 360, 354-5, 367-8, 412-417, 420; Irelli, G. C., ‘Una officina di Lucerne fittili a Pompei’, in: Carandini, A., *L’instrumentum domesticum* cit pp. 53-72; Harris, W.

- V., 'Roman Terra-Cotta Lamps: the Organisation of the Industry', *JRS*. LXX (1980), pp. 126-245; Pavolini, C., 'Le Lucerne nell'Italia romana', in: Giardina, A. E. e Schiavone, A. (a cura di), *Società romana* cit. pp. 139-177.
- (43) ガリア=>T.-S.<に頻繁な《M》,《OF》に関するディヴェロップと省略語の補填, 'm (anu) [huius]' = 「(何某の)手になる」; '[ex] of (ficina) [huius]' = 「(何某の)アトリエ産」は, Knorr, R., *Töpfer und Fabriken*, SS. 8-9 u. 137-138 参照。
- (44) Schönberger, H., *art. cit.* S. 156f.; Planck, D., *Arae Flaviae I. Neue Untersuchungen zur Geschichte des römischen Rottweil* (Stuttgart 1975), S. 95; Rüsck, A., 'Arae Flaviae. Die Militärlager und die Zivilsiedlung in Rottweil am Neckar', in: *ANRW*. II, 5, 1 (Berlin 1976), S. 563 u. 567f.
- (45) Knorr, R., *a. a. O.* S. 8f.
- (46) ブリタニアには立ち入らない。Cf., Hartley, B. R., *op. cit.* pp. 237-250.
- (47) Marquardt, J., *a. a. O.* SS. 722-732; Frank, T., *Econ. Surv.* V, pp. 194-197; Loane, H. J., *op. cit.* pp. 95-97; Heichelheim, F. M., *Wirtschaftsgeschichte des Altertum* II (Leiden 1969²), S. 586 u. 739; Id., 'Römische Sozial- u. Wirtschaftsgeschichte', in: *Historia Mundi* IV (Bern 1956), S. 444; Harden, D. B., 'Glass and Glazes', in: *History of Technology* II (Oxford 1956), pp. 322-324; Kiechle, F., *a. a. O.* SS. 44-66.
- (48) Charleston, R. J., *op. cit.* 16. さらにこの他、ガリアのモンタンにおける>T.-S.<の生産に関して、『ガラス器の模造』の可能性を推測した新解釈も看過出来ない(但し管見の及ぶ所、それに追認を与えた解釈は見当らないが)。
- Martin, Th., 'Vases sigillés imitant des forms en verre?', *Gallia* XXXV/2 (1977), pp. 249-257.
- (49) Grenier, A., *art. cit.* 550.
- (50) Goudineau, Ch., *Le céramique dans l'économie de la Gaule*. Les dossiers de l'archéologie VI (Paris 1974), p. 109.
- (51) Duff, J. W., 'Social Life in Rome and Italy', in: *Cambridge Ancient History* XI (Cambridge 1969²), p. 762f.
- (52) Barrow, R. H., *op. cit.* p. 120.
- (53) Charleston, R. J., *loc. cit.*: 'the Gaulish had superseded the Arretine economically'; Duff, J. W., *loc. cit.*: 'the shifting of centres of production, decentralization.'
- (54) 前掲註(6)参照。Rostovtzeff, M., *a. a. O.* pp. 37, 68, 166-168.
- (55) 前掲註(53)参照。Cf., Oertel, F., *art. cit.* p. 391.
- (56) Oertel, F., *ibid.* p. 422.
- (57) Comfort, H., *Econ. Surv.* V, p. 192.
- (58) Frank, T., *Econ. Hist. of Rome*, p. 223.
- (59) Dechelette, J., *Les vases céramiques ornés de la Gaule romaine* I (Paris 1904), p. 116; Brown, A. C., *op. cit.* p. xviii; Händel, A., 'Zur Produktion und Distribution in der Stadt Rome während des Prinzipats in Auswertung der Inschriften', *Jb. f. Wirtschaftsgeschichte*, Sonderband (Berlin 1983), S. 98.
- (60) 以上の諸学説の他、直接・間接の別を問わずとにかくこれらに連なったものとして次の諸文献が挙げられる。
- Grenier, A., *art. cit.* p. 546; Luzzatio, G., *Economic History of Italy* (London 1961) [Engl. transl. by Ph. Jones], pp.

3-5; Walbank, F. W., *The Awful Revolution. The Decline of the Roman Empire in the West* (Liverpool 1969²) pp. 24 and 51; Jones, C., *op. cit.* p. 10f.; Jones, A. H. M. [ed. by P. A. Brunt], *The Roman Economy* (Oxford 1974), p. 138; Rink, B., ‘Zur Bedeutung des Handwerks im italischen Raum zur Zeit der späten römischen Republik’, *Jb. f. Wirtschaftsgeschichte*, Sonderband (Berlin 1983), S. 68.

さらにこれに加えて、問題を古代商品流通の〈在り方〉そのものの中で処理した、ホワイト、キーヒレの両者もまた、結果的には同様の帰結を得た。この両者に関して言えば、筆者自身もまた同一見解に与するものであるが、後述の如く筆者は、古代奴隷制に対する『近代的な特性』論 (Ed. Meyer) —— 批判はラウファアの所説を参看されたい——と同様に、古代経済への『市場競争』論の持ち込みによる拡大解釈には距離を置き、始源的に『生産』のレヴェルにまで下がって、それに流通事情を重ねたことにおいては異なる。White, K. D., ‘Technology and Industry in the Roman Empire’, *Act. Class.* II (Kapstadt 1959), pp. 78-89, esp. 86 = in: [dt. Übers.] Schneider, H. (hrsg.), *Sozial- u. Wirtschaftsgeschichte d. röm. Kaiserzeit* (Darmstadt 1981), S. 116f.; Kiechle, F., *a. a. O.* S. 111f.; Meyer, Ed., ‘Die Sklaverei im Altertum’, in: *Kleine Schriften I* (Halle 1924), S. 211f.; Lauffer, S., *Die Sklaverei in der griechisch-römischen Welt*. XI. Congr. Intern. d. sciences hist. Rapp. II (Uppsala 1960), S. 72f.

(61) グムメルスの集計 (Gummerus, H., *a. a. O.* S. 1487) では、奴隷『33名』。

(62) Brown, A. C., *op. cit.* p. 23.

(63) 《Pantagatus//C. Annii》(C. XI, 6700, 51b; C. XIII, 10009, 22)、《Pan[t]aga[t]us Rasini Memmi》(C. X, 8056; C. XV, 5514)。

(64) Cf., Westermann, W. L., *Slave Systems*, p. 91f.; Comfort, H., *Econ. Surv.* V, p. 190; Kiechle, F., *a. a. O.* S. 76f. なお、「何某の奴隷」として奴隷主=アトリエ主と〈並んで〉かまたは頻繁にそれを欠いて単独でその名を残した奴隷に、一般(未熟練)労働の奴隷ではなくして、かれらを指揮して生産に従事した『鋳型デザイナー』、『工芸奴隷』あるいは『アトリエ (officina) 指揮奴隷』を特定し、一般労働の奴隷とは区別された存在を見たことでは、従前の諸学説は一致した。筆者もまた、アレティウム=>T.-S.<の銘文に用語例は検出し得ていないが、《OPVS DOLIARE》に規則的に現れる『生産指揮者』‘*offinator*’と同一の機能存在を特定した。Barrow, *op. cit.*, p. 116; Duff, A. M., *Freedmen in the Early Roman Empire* (Oxford 1928), p. 113; Frank, T., *Econ. Hist.* p. 220; Gummerus, H., *a. a. O.* S. 1487; Westermann, W. L., ‘Indust. Slavery’ *cit.*, p. 157; Id., *Slave Systems*, p. 92f.; Schtaerman, E. M., *a. a. O.* S. 111; Brown, A. C., *op. cit.* p. 3; Kiechle, F., *a. a. O.* S. 76; 註7(a), 抽稿, 5頁; 先稿「『OPVS DOLIARE』考(一)」『史淵』CX (1973), 92-93頁。

(65) 《Mahes//Rasini》(C. XI, 6700, 535b); 《C. Memm(i)//C. l. Mahe(tis)》(id. 386)。

(66) 註(63) 参照。

(67) Brown, A. C., *op. cit.* p. 21: “collaboration”; Stenico, A., *La ceram. arret.* I, p. 18: “consociati”. Vgl. Gummerus, H., *a. a. O.* S. 1489.

(68) 奴隷に対する所有権を初めとして実態は不明だが、この「連名」例が排他的にメンミウスの生産跡で発見されること (Brown, A. C., *loc. cit.*) から推して、ラシーニウスがここで共同生産に従事したことだけは確かである。

(69) 以下の時期区分はブラウン (Brown, A. C., *op. cit.* p. 3) に拠る。

(70) ここでは、明らかに長期間にわたって使用された形跡を止める陶土捏ね用の大型平槽一基が遺された。Comfort,

H., *Econ. Surv.* V, p. 190; Kiechle, F., *a. a. O. S.* 73.

(71) ブラウン (Brown, A. C., *loc. cit.*) は、アレツツオの『本工場』“main factory”に対して、『支工場』“branch factory”の語を当てた。

(72) Oxé, A., *Arret. Reliefgefäße*, S. 33. Vgl., Dragendorff, H., *Reliefkeramik*, S. 44f.; Kiechle, F., *a. a. O. S.* 78.

(73) かれの「元奴隷」としての存在は、次のスタンプ銘に明らかである。《*Bargathe M. Peren*》(C. XI, 6700, 451a)。

(74) Brown, A. C., *loc. cit.*

(75) *Ibid.* p. 29. Cf., Walters, H. B., *A History of Ancient Pottery II* (London 1905), p. 482. なおチンチェルリのアトリエ遺構から、アウグストゥスの頭部像に《*Rado//Augustus*》の銘文をもつ事例 (C. XI, 6700, 247a) が発見されており、この事例は、コルネリウスの製造時期推定に好個の手懸りを提供した。

(76) Westermann, W, L., *Slave Systems*, p. 91f.

(77) Brown, A. C., *op. cit.* pp. 27, 29.

(78) 鋳型作成乃至 >officina< 指揮の奴隷に、素地作り・型入れ・焼成担当奴隷など、補助労働の奴隷 4, 5 名によって生産単位——アレティウム = >T.-S.< に筆者はなお検出し得ていないが、“manu” (huius”と並んで、ガリア =>T.-S.< に頻繁な用語例、“[ex] of (ficina) [huius]”に明らかな《officina》(註(43)参照)を構成した生産については、註(7a, b)に挙げた拙稿並びに註(64)に挙げた諸文献を、さらにまた同一の形態で、それ自体が >officina< の複数体であった >figlinae< の増設によってのみ大規模化が実現された、ローマ皇帝・貴顕身分の首都近郊地所を中心とした >opus doliare< の生産については、前掲拙稿「《OPVS DOLIARE》考(一)」89-101頁を参看されたい。

(79) 蹄鉄の欠如、輪具の不備に高輸送費 (cf. e. g., *Edictum Diocletiani* XVII, 3) もまた加わって惹起される長距離重量陸路輸送の困難さ、大河は別として地中海内陸水路のコンスタントな利用の困難さ(夏期の濁水と冬期の増水)を伴う地中海交通事情一般にまで、本稿は到底立入り不能であり、差当り筆者が参看し得た次の諸文献を挙げておく。Yeo, C. A., ‘Land and Sea Transportation in Imperial Italy’, *TAPhA*. LXXVII (1946), pp. 221-241; Burford, A., ‘Heavy Transport in Classical Antiquity’, *Econ. Hist. Rev.* XII/1 (1960), pp. 1-16; Id., *Craftsman in Greek and Roman Society* (London 1972), pp. 117-119; Kiechle, F., *a. a. O. S.* 156f.; Reece, D. W., The Technological Weakness of the Ancient World, *G. & R.* XVI/1 (1969), p. 41f.; Jones, A. H. M., *op. cit.* p. 131. さらに古代交通事情を >T.-S.< 生産の展開に連結した解釈として、管見の及ぶ所では、それを生産地『拡散化』の重要モメントと見做したキーヒレ/ジョーンズ説 (Kiechle, F., *a. a. O. S.* 111; Jones, C., *op. cit.* p. 10f.) に対して、その後「距離ファクター」は拡散化の決定要因になり得なかったとするブッチの反論 (Pucci, G., ‘Pottery and Trade’, p. 115: ‘the factor of distance can not be decisive’) が出されているが、筆者にとってもまた当面の主要問題は、改めて繰返すまでもなく、拡散化の『最主要ファクター』としての『古代奴隷制のメカニズム』それ自体に置かれる。

(80) リース (Reece, D. W., *art. cit.* p. 45f.) は、ガリア南部から北東部への生産中心地の移動の『主要原因』(the main cause of the move) として原料または燃料の『深刻な不足』(a serious shortage of the raw materials used by the industry or of fuel) の可能性を挙げる。確かに燃料枯渇の故に現地での溶鋳が不可能になった、とするエルバ島鉄鋳山のような史料 (Strab. V, 2, 6) は見当たらないが、『移動』の一要因として付加してよいかもしいない。

(81) Comfort, H., *RE. Suppl.* VII, SS. 1329-1331. 生産地、生産年の同リストには未収録のアフリカに関しては、Kern, J.

H., 'Roman Terra Sigillata Dish from Tunisia', *Mnemosyne* XI/2 (1958), pp. 150-156 参照。

(82) 本稿では到底そこまでは及び得ないが、事情は3・4世紀に入っても同様であった。地中海世界各地の〈窯〉に拠った陶器生産は、質と量並びに流通の広がりにおいてもまた、1・2世紀の>T.-S.<には到底及びもつかなかったにしても、流通の〈在り方〉に関して言えば、直接的な『ローカル市場』を前提とし乍もその枠内に止まることなく、他方では(量的には比較にならなかったにしても)『インター・ローカル』な側面もまた維持し続けた。Cf. e. g., Fulford, M., 'Pottery and Britain's Trade in the Later Roman Period', in: Peacock, D. P. S. (ed.), *Pottery and Early Commerce: Characterization and Trade in Roman and Later Ceramics* (London/N. Y. 1977). pp. 35-84.

(83) Pucci, G., 'Le terre sigillate italice', pp. 11-14.

(84) Oxé, A., Arret. Reliefgefäße cit. S. 38f.; Martin, Th., 'Les ateliers du sud de la France: Groupe de Montans', dans: Bémont, C. et Jacob, J.-P. (sous la direction de), *La terre sigillée gallo-romaine. Lieux de production du Haut Empire* (Paris 1986), pp. 58-71.

(85) Picon, M. et Gramier, J., 'Un atelier d'Ateius à Lyon', *Rev. Arc. de l'Est et du Cent.-Est*, XXV/1 (1974), pp. 71-76.

(86) Frank, T., *Econ. Hist.* p. 223; Comfort, H., *RE*. cit. S. 1318; Grenier, A., *art. cit.* p. 542; Brogan, O. *op. cit.* p. 143; Kiechle, F., *a. a. O.* S. 78.

(87) 註(84)参照。当該例を初めその他南部ガリア陶工のアレティウム陶工との強度の関係については、Oswald, F., 'Arretine and Early Gaulish Potters', *JRS*. XLVI (1956), pp. 107-114 参照。

(88) Hähnle, K., 'Ateius', *RE*. Suppl.III (1918), S. 174f.

(89) Maetzke, G., 'Notizie sulla esplorazione della fornace di Cn. Ateius in Arezzo', *RCRF. Acta* II (Roma 1959), pp. 25-27.

(90) Picon, M. et Gramier, J., *loc. cit.*

(91) Oxé, A., 'La Graufesenque', *Bonn. Jb.* CXL (1936), SS. 325-394; Vernhet, A., 'Un four de la Graufesenque [Aveyron]: caisson des vases sigillés', *Gallia* XXXIX/1 (1981), pp. 25-43; Kiechle, F., *a. a. O.* S. 81; Pucci, G., *art. cit.* p. 17.

(92) Hermet, F., *La Graufesenque-Condatomago* I (Paris 1934), p. 182; Oxé, A., *Graufesenque* cit. p. 340; Comfort, H., *RE*. cit. S. 1329f.

(93) Déchelette, J., *op. cit.* p. 64; Grenier, A., *art. cit.* pp. 543-547.

(94) Comfort, H., *loc. cit.*

(95) Cf., Déchelette, J., *op. cit.* pp. 139-149; Grenier, A., *art. cit.* pp. 547-549. ルズーでは、3 軒平方にわたって大規模な >figlinae< 遺構 70 が確認されている。>T.-S.<生産の成立と〈ラ・テーヌ III〉との関連については、概観として、Julian, C., *Histoire de la Gaule* V (Paris 1920), p. 274、さらに同ルズー=>T.-S.<生産の技術面に関しては、>figlinae< 遺構の考古学知見に基づく〈窯〉の復元、並びに定量分析方法を導入した生産技術に関しては、Picon, M., *Introduction à l'étude technique* cit. pp. 55-83 を参看されたい。

(96) コムフォートのこのリスト(1940年)はもはや古い。未収録のリヨンについては後述箇所参照。さらに中部ガリ

アで最早期の成立が推定された (a. 69/96) サン・レミ・アン・ロラにしても、その後の発見例が新たに追加されており、Vertet, H., ‘Céramique de Saint-Rémy-en-Rollat’, *Gallia* XIX/1 (1961), pp. 218-225 の報告を参看されたい。

(97) Comfort, H., *art. cit.*

(98) Ibid.: Luxeuil (a. 80 ~ 120), Heiligenberg (a. 100 ~ 130), Aachen-Schönforst (a. 100 ~ 稼働期間は「短命」), Baden im Aargau (a. 100 ~ 120), Windisch (a. 100 ~ 120), Chémery-Faulquemont (a. 105 ~ 135), Blickweiler (a. 105 ~ 140), Trier (a. 110 ~ 240), Ittenweiler (a. 110 ~ 130), Mandeuire (a. 110 ~ 130), Lavoye (a. 120 ~ 200), Avocourt I (a. 120 ~ 200), Avocourt II (a. 270 ~ 400), Rheinzabern (a. 130 ~ 200), Eschweilerhof (a. 130 ~ 160), Les Allieux (a. 130 ~ 200), Pont-des-Rêmes (a. 130 ~ 200), Altenstadt (a. 140 ~ 150), Schiltigheim-Strassburg (a. 150 ~ 160), Jepsheim (a. 160 ~ 170), Sinzig (a. 180 ~ 200), Pont-des-Quatre-Enfants (a. 270 ~ 400). この内、トリアー及び本リストに未収録のロットヴァイルの両者については、直ぐ後で言及する。同様に未収録のミッテルブロンのアトリエ調査は、Lutz, M. M., ‘L’officine de céramique gallo-romaine de Mittelbronn (Moselle)’, *Gallia* XVII/1 (1959), 101-160 に報告された。

(98a) 以上コムフォートの遺構リストに加えて、さらにその後の情報量の急増を取り込んだ次のシンテーズを参看されたい。Bémont, C. et Jacob, J.-P. (sous la direction de), *La terre sigillée gallo-romaine* cit., p. 72ff.

(99) Huld-Zetsche, J., Trier Reliefsigillata Werkstatt I. Röm.-Germ. Komm. d. Deut. Arch. Inst. (hrsg.), *Materialien zur Röm.-germ. Keramik* IX (Bonn 1972), SS. 25-32.

(100) キーヒレ (Kiechle, F., *a. a. O.* S. 88f.) は併し、生産地相互間の密接な関係は承認し乍も、陶工の『移転』‘Verlagerung’については、同一名の陶工が必ずしも同一人であったとは限らない、という特定困難さの故に慎重を期した。

(101) Vgl., Kornemann, E., ‘Colonia’, *RE*. IV/1 (Stuttgart 1900), S. 522, Nr. 31; Ermon, E., ‘La date de la fondation de la Colonie Narbo Martius en Gaule Narbonnaise’, *RHDE.*, LIV (1976), pp. 229-238.

(102) 差当りここでは、以上によって古代地中海経済の》展開の仕方《に一つの展望が拓かれ得たことで充分であり、商品需要、それ故にまた流通の「量的かつ質的な在り方」は別問題(註(123)参照)である。

(103) Lugdunum: La Sarra, Loyasse;

Saône: La Butte, La Muette I, La Muette II;

Rhône: St. Sébastien, La Quarantaine;

Canabae: Place A. Poncet.

(104) Lasfargues, J., ‘Les ateliers de potiers Lyonnaises: étude topographique’, *Rev. Arch. de l’Est et du Centre-Est* XXIV/3-4 (1973), pp. 525-535.

(105) Picon, M. et Lasfargues, J., ‘Transfert de moules entre les ateliers d’Arezzo et ceux de Lyon’, *Ibid.* XXV/1 (1974), pp. 61-69.

(106) Comfort, H., *RE*. cit. SS. 1332-1337.

(107) Vertet, H., ‘Remarques sur les rapports entre les ateliers céramiques de Lezoux, de la vallée de l’Allier, de la Graufesenque et ceux de Lyon’, *RCRF. Acta* XIII (Roma 1971), pp. 92-111; Picon, M. et Vich, M., *art. cit.* pp. 37-59.

(108) 註(33) 参照。

(109) 前者が「野営地」(Feldlager)・「大宿営地」(29ha)・[聖アンナベルク]「小砦」(St. Annaberg)・「河岸砦」(Uferkastel)を取り込んだ大城砦であった。これに対して後者は小規模(1.6ha.)な「前哨砦」であった。Schönberger, H., *art. cit.* p. 147.

(110) *Ibid.* p. 149.

(111) スタンプ銘を残した陶工が職業として専門化した存在であったか否かと同時に、その下にあったであろう補助的労働諸力の実態についてもまた、銘文は直接的には何も教えない。

(112) Rüscher, A., *a. a. O.* S. 595.

(113) ガリア部族ハエドゥイの「町」‘oppidum’ = Bibracte は、カエサルによる焼払いの後アウグストドゥヌム(Augustodunum: 現オートン Autun)が建設される迄、軍団駐屯の城砦が置かれた。〈コロニア〉建設以前の>T.-S.<は、全てがアレティウム産で占められたのに対して、以後の>T.-S.<は、1947～48年の調査によれば、全てが南部(Banassac, La Graufesenque)、中部(Lezoux)、東部(Luxeuil)のガリア産で占められた。Dragendorff, H., *Terra-sigillata cit.*, S. 50; Oxé, A., ‘Nomenklatur’ *cit.* S. 130; Grenier, A., *art. cit.* p. 545; Brogan, O., *op. cit.* p. 104; Vgl., Krämer, W., *Geschichte der Gemeinde Gauting* (Gauting 1949), SS. 32-37; Salmon, T., *Roman Colonization under the Republic* (London 1969), p. 160.

(114) ガリア〈工業〉に関して、>T.-S.<を主題とした論攷に小笹桂子「ローマ製陶業にみられるガリア工業の性格」『文化史学』XXXIV (1978) 35-47 頁がある。

(115) プリーニウスは、経営に対する無関心(incuria)あるいは「質より量」を優先させる大土地所有主一般の価値観(culpa copiae potius quam bonitati studentium)、それ故他ならぬ奴隸制それ自体及びそれに起因する品質低下の故に、イタリアの2大銘柄酒は今や「消滅した」(iam intercidit; exolescit)と記述する。併し4世紀における銘柄酒の存続(Edict. Dioclet. II, 7)を初めとして現実には必ずしもそうではなかった。アムフォラ研究から発せられた問題諸点は、次の論考を参看されたい。Tchernia, A., ‘Quelques remarques sur le commerce du vin et les amphores’, in: D’Arms, J. H. and Kopff, F. C. (eds.), *The Seaborne Commerce of Ancient Rome* (Rome 1980), pp. 305-310.

(116) Déchelette, J., *op. cit.* 116; Duff, J. W., *art. cit.* 762; Grenier, A., *art. cit.* p. 546; Brown, A. C., *op. cit.* pp. 3-20, 38.

(117) これ自体既に別稿で処理されるべき問題であり、差当りここでは、最も顕著な形で検出され得た次の一事実が挙げられるだけでよい。即ち生産の拡大化が図られた『ベレンニウス第Ⅱ期』に入るや否や、一目して明白な構図と浮彫像の「画一化」・「没個性化」、浮彫像仕上げの「粗雑化」が表面化された事実である。而もこの事実は、>T.S.<のみの単独現象では決してなくして、『イタリア=ウィラ経済』もまた同様(註(115)参照)であり、その限りでは、ローマ奴隸制の中で一般化が可能であろう。

(118) イタリア大土地所有制それ自体に関して言えば、流通の消長を直接的に証言するアムフォラの集中的に大量の発見(例えばマルセーユ沖のような)と相俟って、型研究を中心とした年代と生産地特定研究の急進捗を踏まえて、シラゴ(V. A. Sirago)、次いでそれを発展的に継承してパネラが、1世紀後半に至って顕著な形で、とりわけ『ローマ化』が進行した西部諸属領との間で「経済競争が開始」され(C. Panella: ‘comincia a farsi sentire in maniera rilevante la concorrenza economica delle provincie’),この結果イタリアの果樹栽培は不振に陥った、として〈新事実〉による『市

『競争』の補強を図ったのに対して、同様に新事実を踏まえ乍らチェルニア/ツェヴィ両者が、古代経済における『競争』の決定力を疑問視し、地中海商品流通における「一方による他方の排除」を否定して(A. Tchernia/F. Zevi: ‘ces courants commerciaux ne s’excluent pas les uns et les autres’)、古代経済展開の新図式(ここでは詳細に触れ得ないが)を示唆したことがその一例である。Sirago, V. A., *L’Italia agraria sotto Trajano* (Louvain 1958), pp. 252-258; Panella, C., ‘Annotazioni in margine alle stratigrafie delle Terme Ostiensi del Nuotatore’, dans: *Recherches sur les amphores romaines*. Collection de l’École Française de Rome X (Rome 1972), pp. 72-78; Tchernia, A. et Zevi, F., ‘Amphores vinaires de Campanie et de Tarraconaise à Ostie’, dans: *Ibid.* pp. 66-67.

(119) Cf., West, L. C., *Imperial Roman Spain: the Object of Trade* (Oxford 1926), pp. 14-19, 22-27; Loane, H. J., *op. cit.* pp. 20-24; Nostrand, J. J. van, ‘Roman Spain’ in: *Econ. Surv.* III (Baltimore 1937), p. 177ff.; Rostovtzeff, M., *op. cit.* p. 188f. and n. 11; Manacorda, D., ‘Anfore Spanole a Pompei’, in: Carandini, A. (direct.), *L’instrumentum domesticum* cit. pp. 121-133; Almeida, E. R., ‘Novedades de epigrafía anforaria del Monte Testaccio’, in: *Recherches sur les amphores romaines* cit. pp. 107-137.

(120) 拙稿「1世紀後半～3世紀初のイタリアに於ける大土地所有の形態と構造(1)」『歴史学・地理学年報』VIII (1974) 62-82頁参照。

(121) 註(78)前掲論考107-8頁参照。

(122) だが併しその一方では、テラコッタ・ランプ、タイル、レンガ等々の粗陶器、即ち広義の所謂>opus doliare<でさえ、明らかに『陸路』に拠って長距離をコンスタントに、而も他ならぬ「商品」として運ばれたことをわれわれは知っている。この事実だけからでも既に、ローマの陸路は『軍道』であって『交易路』ではなく(‘Militär- und nicht Verkehrsstraßen’)、恒常的な商業の対象は、大部分が高価の故に高輸送費にも引き合いがとれる「奢侈品」(‘Luxusgegenstände, welche infolge ihres hohen Preises die gewaltigen Transportkosten tragen können’)の『薄い層』‘eine dünne Schicht’にすぎなかった、と見做す古代経済像(M. Weber)の一般化に疑問を投げ掛けるものであり、古代世界が最後まで解決出来なかった技術的な輸送能力(註(79)参照)そのものは承認されねばならないにしても、このモメントの過大解釈は避けねばならない。Weber, M., *Die sozialen Gründe des Untergangs der antiken Kultur*, in: Winckelmann, J. (hrsg.), *M. Weber: Soziologie, weltgeschichtliche Analyse, Politik* (Stuttgart 1968), SS. 4-5.

(123) 『資本主義』はもとより、帝国西部の『経済的解放』と『市場競争』、及びそれに直接的に起因するイタリア商品経済の『不振』と『奴隷営舎の解体』に対してもまた、筆者が距離を置く理由である。

(124) 註(115), (117)参照。

(125) このためには、最近ブリタニアに関してフルフォード(M. Fulford)、ラクリン(N. Loughlin)、ピーコック、3～4世紀のガリア陶器に関してフェルディエール(A. Ferdière)等々が企てつつあるような『歴史地理学』的な方法——例えば「中心地論」の如き》空間《処理もまた、有効手段の一つとして援用が模索されてもよいであろう。Loughlin, N., ‘Dales Ware. A Contribution to the Study of Roman Coarse Pottery’, in: Peacock, D. P. S. (ed.), *Pottery and Early Commerce: Characterization and Trade in Roman and Later Ceramics* (London/N. Y. 1977), pp. 85-146; Peacock, D. P. S., ‘Pompeian Red Ware’, in: *Ibid.* pp. 147-162 (フルフォードは前掲註(82)参照); Ferdière, A., ‘Organisation et contrôle de l’espace rural par la ville’, dans: *Villes et campagnes dans l’Empire romain* (Aix-en-

Provence 1982), pp. 95–100. Cf., Pounds, N. J. G., ‘The Urbanization of the Classical World’, *Ann. of the Assoc. of Americ. Geog.* LIX (Washington D. C. 1969), pp. 135–157; Hodder, I., ‘Spatial Studies in Archaeology’, *Progress in Human Geography* 1/1 (London 1977), pp. 33–64; Id., ‘The Human Geography of Roman Britain’, in: Dodgshon, R. A. and Butlin, R. A. (eds.), *An Historical Geography of England and Wales* (London 1978), pp. 29–55; Johnson, G. A., ‘Aspects of Regional Analysis in Archaeology’, *Ann. Rev. of Anthropology* VI (1977), pp. 479–508.

(126) 註(98)参照。勿論ここから直ちに商品生産そのものの『停止』は語られ得ないにしても、3世紀に入って、帝国経済が『新たな局面』を迎えたことを暗示するに充分であった。

[付註]

既述の如く筆者は先に、《OPVS DOLIARE》の銘文検討から得られた帰着点(1973年)の一つとして、瓦窯を構成する夫々単一の生産組織を成した >officina< を指揮した奴隷・解放奴隷に対する用語法、>officinator< を、然るべき適切用語皆無のアレティウム = >T.S.< にもまた適応(註(64)参照)したが、その後(1997年)、筆者と全く同一の解釈(‘the proper term for their function is officinator’)が提出された。この機会に改めて触れておこう。Rülle, G., ‘The Internal Organization of the Arretine Terra Sigillata Industry: Problems of Evidence and Interpretation’. *JRS.* LXXXVII (1997), pp. 111–155.

[付記]

この論考は、2018年に逝去された馬場典明先生の遺品を整理されたご遺族から託されたものである。第一章と第二章の執筆時期は先生が別府大学を退職された2003年とのことであった。第一章と第二章は以前発表された論考を、新たに書き直されたもので、第三章以降もそのご意向であったが、先生のご病氣療養のため果たせず未完となった。今回の論考の刊行に当たっては、本学文学部史学・文化財学科の飯坂晃治教授のご協力を得た。ここにご遺族に代わって感謝を申し上げたい。

山本晴樹 (別府大学名誉教授)